

### 1994年 春季大会 プログラム

会場：豊島区立男女平等推進センター エポック10  
豊島区西池袋1-11-1 メトロポリタンプラザ10F  
(池袋駅東口)  
☎ 03-5954-1015  
参加費：一般 各日500円  
学生・会員 無料

#### 第1日目：6月18日(土)

13:00 受付開始  
13:30 シンポジウム

#### 「フェミニズム文学批評に何ができるか」

シンポジスト： 津島佑子 (作家)  
江種満子 (文教大学、日本文学)  
小林富久子 (早稲田大学、アメリカ文学)  
コーディネーター：漆田和代 (エッセイスト、日本文学)

16:30 終了  
17:00 定例総会  
(なお会員以外の人向けにこの間ビデオ上映を予定)  
18:45~20:30 懇親会(於会場、参加申し込みは当日)

#### 第2日目：6月19日(日)

10:00~11:00 個人研究発表  
梶本玲子 「フランスの女性の研究の現状」  
鳥居千代香 「M. K. インディラ著『幼い未亡人』についてと、作品の意義」  
10:00~12:15 ワークショップ  
富岡明美 「アメリカのレズビアン批評はここまで来た。  
日本でのレズビアン批評はありえるか？」  
11:15~12:15 個人研究発表  
田中由布子 「女性とヨーロッパの城」  
北沢杏子 「HIV/AIDSをフェミニズムの視点でみる！  
一係争中の3つの訴訟の連鎖性について」  
12:15 昼食  
13:00~15:00 ワークショップ  
田辺いと枝・西山千恵子・福永とし子「女・表現・行政」  
渡辺和子 「キャンパスにおけるセクシュアル・ハラスメントとその背景」  
高良留美子・荒井とみよ・漆田和代「岡本かの子解説」  
15:00 閉会

(会場地図はP.5をみて下さい。)

## シンポジウム・レジュメ

### ●フェミニズム文学批評に何ができるか

ここ数年、日本文学の分野でフェミニズム文学批評への関心が著しく高まっている。

その背景には、おそらく、日本文学研究者はもとより、外国文学研究者や比較文学研究者、および、必ずしも文学研究を専門としているわけではない女性学研究者たちや外国人の日本文学研究者（の女性）たちが、期せずして手を携え、同時多発的に仕事の成果を発表したり、シンポジウムを開いたり、定例の研究会を組織するようになってきたことが、大きく与っていることと思われる。

このような一見頼もしい状況変化のみられる反面、緒についたばかりの日本文学におけるフェミニズム批評を更に推し進める上で、見過ごしにできない気がかりも、今や一層ははっきり浮かび上がってきている。文芸ジャーナリズムは、気の早いことに、フェミニズム批評の限界、衰退を口に始めている。フェミニズムの含意をことさら狭くうけとって、自分はフェミニズムとは関係ないのだと言いたてる女性作家たち（これについては津島さんが『フェミニズム』という言葉』という一文で疑義を呈しておられる。『すばる』94年2月号より）、フェミニズム批評用語を用いながら、素朴な女性の感性や視点を大切にするタイプの批評に対しては冷笑・嫌悪を隠さない論文も、専門誌に登場し始めた。

以上のような状況をふまえて、このシンポジウムでは、主に、日本におけるフェミニズム文学批評のこれまでとこれからを考えるために、当事者たる日本文学の研究者と、理論の面では日本の研究状況より何歩か先んじることによって次の課題に直面しているかにみえる外国文学研究者、研究者とは立場を異にする作家という、少しずつ食い違った視点に立つ三者からの報告を行なうことにした。お招きする作家として、津島佑子さんにご承諾をいただくことができ、こんなにうれしいことはない。津島さんは70年代後半から産む性としての女性の立場に立ちつつも、家族・家庭の問題をかつてない斬新な視点から掘り起こされ、第二波フェミニズム運動後の女性たちの感性に見合った清新な女性像を力強く描き出してくれた作家である。その作品は現在英語、フランス語等にも翻訳されていて、主に女性の読者を中心に各国の人々から高く評価されており、津島文学の普遍性を言う研究者も少なくない。

プログラムの進め方としては、まず津島さんより、フェミニズム批評の動きが創作の現場にもたらしたインパクトについて肯定・否定面合わせて、御自身の具体的な作品に触れつつ語って頂き、次いで日本文学研究者である江種さんからは、フェミニズム批評の導入が日本文学研究にもたらした変化、および、今後の展開について、自身の研究の道筋との関わりで話して頂く。最後に小林が、

外国とくに米文学研究者の立場から、70年代に盛んであった女性中心の「ガイノクリティックス批評」から、今日の人種・階級・性的指向等の差異を視野に入れる「ポストモダン批評」に至るまでの米国のフェミニズム批評の流れを辿り、さらに、これら二つの立場間で交わされている論争や、その亀裂を埋めるものとして期待される最新の「ポスト植民地主義批評」等にも触れることで、日本での今後のフェミニズム批評のあり方を探るよすががともしてみたい。いずれにしろ、フェミニズム文学批評は差異の豊かさを主張するものでもある以上、パネリスト間だけでなく、会場の参加者からの活発な意見表明や相互間のやりとりをコーディネーターの漆田から特に希望しておきたい。（文責 漆田和代・小林富久子）

### 参考文献

- 駒尺喜美『魔女の論理』エポナ社、1978年。増補改訂版、不二出版、1984年。  
水田宗子『ヒロインからヒーローへ—女性の自我と表現』田畑書店、1982年。  
水田宗子『フェミニズムの彼方——女性表現の深層』講談社、1991年。  
上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房、1992年。  
江種満子・漆田和代編『女が読む日本近代文学—フェミニズム批評の試み』新曜社、1992年。  
武田美保子他『読むことのポリフォニー—フェミニズム批評の現在』ユニテ、1992年。  
エレイン・ショーウォーター編、青山誠子訳『新フェミニズム批評』岩波書店、1990年。

Elaine Showalter ed. The New Feminist Criticism, (New York: Pantheon Books, 1985)

Trinh Minh-ha When the Moon Waxes Red Representation, Gender and Cultural Politics (New York: Routledge, 1991)

〈小林富久子訳でみすず書房より刊行予定。〉

○ ○ ○ ○ ○

津島佑子さん（1947年生）主要作品—文庫本を中心に。

（ ）内は単行本の発行年。

『葎の母』（1975年）河出文庫

『寵児』（1978年）河出文庫

『光の領分』（1979年）講談社文芸文庫

『山を走る女』（1980年）講談社文芸文庫

『火の河のほとり』（1983年）講談社文芸文庫

『夜の光に追われて』（1986年）講談社文芸文庫

『大いなる夢よ、光よ』（1991年）講談社

## 個人研究発表・レジュメ

### ●フランスの女性の研究の現状

梶本玲子

フランスの女性に関する機関には、政府の機関として女性権利サービスや女性情報センター（CNIDFF）、女性研究機関、女性団体、女性の出版社・図書館がある。女性研究機関には、CNRS（国立科学研究センター）と大学があり、パリでは、パリ第7大学、パリ第8大学、地方では、エクス・アン・プロヴァンス大学、リヨン第2大学、トゥールーズ・ル・ミライユ大学、ボルドー第1大学がある。

フランスの女性の研究は、フェミニスト研究（エチュード・フェミニスト）と女性研究（エチュード・フェミニヌ）に分かれる。フェミニスト研究は社会学や歴史学の色彩が濃く、女性研究は文学や哲学の傾向がある。現在は、フェミニスト研究が中心である。

1989年には、フェミニスト研究の全国組織ANEFの活動が始まり、大学・研究所間の共同研究等が活発に行われている。また、CNRSでは、社会学を中心とする女性研究グループGEDISSTが設立され、その他、ATP（1983-1987年）とAPRE（1984-1988年）という2つの大きなプロジェクトが実施されている。

1968年、MLF（女性解放運動）の当時、学生や大学の助手だった女性達が、現在、研究機関や大学での研究の中心的な役割を果たしている。パリで会った歴史学者のミッシェル・ペローさんは、「1970年代は女性運動、1980年代は権利要求、1990年代には女性の時代」と語っていた。

本発表では、1992年、1993年の2年間に渡りこれらの女性研究機関の現状を調査した結果について報告する。

### ●M. K. インディラ著『幼い未亡人』についてと、 作品の意義

鳥居千代香

インドのヒンドゥー教徒の女性、特に未亡人の地位は低い。女性には結婚前の処女性と結婚期を通じての貞節を要求し、男性は妻の死後すぐに新しい妻をめぐることが許されてきた。未亡人は再婚を許されず、髪を剃られたりさまざまな制限を加えられ、生きる屍のような生活を強いられた。本書、『幼い未亡人』はM. K. インディラが、1840年ごろに生まれ、1952年に死んだ“大叔母”について書いたものである。

1976年にカンナダ語で『パニヤマ』という題で出された本書は、インドの文学賞である「カルナータカ・サヒタヤ・アカデミー賞」を受けた。少女パニヤマは9歳で15歳のナンジュンダと結婚させられた。結婚式が終わって2か月たったばかりのときに、未亡人となり、社会の偽善性とごまかしのなかで、実家の家事をすべてこなし、出産の手伝いをし、家にいる子供達の世話をし、家のも

のから頼りにされて生きていく。この作品の意義を考える。

### ●女性とヨーロッパの城

田中由布子

私が城に関心を持ち始めたのは、城自体の美しさはもちろんのこと、城は権力の象徴、つまりそこで、男性支配のドラマが展開されたということ、さらにはそこで、歴史が創られてきたということによる。

女性が、ヨーロッパの城内で、歴史の創造に関わった少数の女王、王妃、愛妾の存在を知ることは、城の機能や意味もさることながら、女性による世界史的視点の確保、つまり、一般女性の視点で、女性の全体史を知ること、逆に女王や王妃、愛妾の位置を通して、自己の位置を知ること、そういう世界観の問題として重要である。

女性が、ヨーロッパの城の中で、行われた女王、王妃、愛妾の活躍を知ることは、一般庶民の労働や家事、性労働における女性の活躍を知ることと合わせて、女性のアイデンティティの問題として重要である。

### ●H I V / A I D S をフェミニズムの視点でみる！

一係争中の3つの訴訟の連鎖性について一

北沢杏子

H I V 薬害訴訟、人骨返還訴訟、朝鮮人「従軍慰安婦」訴訟—現在係争中のこの3つの訴訟は、それぞれの学者、研究者、運動体が、ばらばらに調査し支えているのが現状である。

しかし、この3つの事件の連鎖性に気づくのはフェミニズムの視点を持った人間だけのように思う。私は数年来、ピースボートの水先案内人として韓国の「女子挺身隊」問題協議会の女性たちと話しあい、日本での「従軍慰安婦」国際公聴会ほかを取材してきた。また、「731（生体実験）部隊展」の実行班として、'93年には中国のハルビンと平房に731部隊跡を取材。新宿区戸山の旧陸軍軍医学校跡からでてきた100体を越す人骨の鑑定と返還を要求する生き残り証人たちとも会ってきた。

さらに、H I V 薬害訴訟については支える会会員として傍聴を重ね、人権侵害と深くかかわる「エイズ」問題を支援。'93年にはサンフランシスコ他でエイズの取材を行なった。この3つの事件の連鎖性について、現地で撮影したスライドを使って報告したい。

## ワークショップ・レジュメ

### ●アメリカのレズビアン批評はここまで来た。 日本でのレズビアン批評はありえるか？

富岡明美

アメリカン・フェミニズムの発動力・原動力となってきたレズビアニズムは、批評の領域でもフェミニズムと共に発展してきた。1981年のジママンによる先駆的な文学批評概観には、既出版の論文27、未出版の論文14が言及されている。そして1990年には、1970年から1989年までに、レズビアン作家や作品などに関する論文が500近く、そのうち批評理論についてだけでも41あることがわかっている。リベラルな大学では、レズビアン批評がフェミニズム批評に取って代わり、新たな注目を集め始めている。

思えば、レズビアン批評は〈レズビアン〉の定義から始まり、レズビアン文学の規範と伝統の確立を経て、本質論から反本質論へと変遷して来た。そして今や時代は理論論争の時代へと入り、研究者は理論とコミュニティ、理論と運動の狭間に立たされている。

このワークショップではこのようなアメリカでの批評経過を詩や小説の流れと共に紹介し、とかく「男に向かって発話し続けてきた」日本型フェミニズムの土壌で「レズビアン批評はありえるのか」について活発な議論をしたいと願っている。

### ●女・表現・行政

田辺いと枝・西山千恵子・福永とし子

日本学術会議の講演に「ジェンダーと芸術」がとりあげられる等、ようやく「女性と表現」も日本でオモテに現われ始めた。早くからあった文学批評はもちろんのこと、少ないながら美術・映像・建築・音楽も理論的取り組みを始めている。ではこの表現、行政ではどう扱われているのか。報告と今後の展望を話し合うのが、このワークショップである。

呼び掛け人3人からの報告及び、都内自治体の現状を資料として配布し、①女性政策と表現、②文化課・美術館等での女性問題を考えたい。全体討論では、行政サイドからのご発言も伺いたい。とかく権威にもたれかかる自治体の取り組みを目の当りにして、“クラシック音楽”や“美術館”の枠をはずしたらどんなやりかたがあるのか。もし段階的に取り組むならどんな方法が可能か。又、専門性を要求されない現行の自治体職員に向けての資料作りの提案などもしていきたい。（田辺）

### ●キャンパスにおけるセクシュアル・ハラスメントとその背景

渡辺和子

京大の矢野事件以来、教育の場におけるセクシュアル・ハラスメントが注目されている。これまで同様のことは、

男性教師と女子学生とのスキャンダルとして見過ごされてきた。今回は被害者の女性たちが勇気を出して告発し、また、少数ながら大学の内外から女性たちがこの事件を教育の場における性暴力、人権侵害として、さまざまな取り組みを大学に要求している。

この事件自体は加害者が被害者やその支援者を訴えるという予期しない方向に発展している。が、この事件を契機に女性学の立場から、セクシュアル・ハラスメントを生み出す、教育の場における性差別の構造を考えていきたい。そして、このようなセクシュアル・ハラスメントの対策のために、大学における性差別の調査や取り組みの報告を受けて、日本女性学会で何ができるかを話し合いたい。

### ●岡本かの子解読

高良留美子・荒井とみよ・漆田和代

小説「鶴は病みき」「母子叙情」「老妓抄」「生々流転」などで知られる岡本かの子（明治22—昭和14年〔1889—1939〕）は、20代で歌人として出発し、仏教研究者として名を馳せたのち、小説に転じたが、晩年3年足らずの作家活動への評価が今日では最も高い。が、残念ながらその文学の受容、評価という点では、作者自身の特異な風貌や謎めいた経歴の紹介とも相まって、ある種の作中人物（特に女性像）と作者の共通性を言い立てることに熱心な、不十分なものでしかなかった。“いのち”“母性”“白痴性”といった言葉で飾られたかの子文学のパターン化された受容への批判、このような見方と小説の発表された時代背景との共犯・共謀性、新たな読解の手がかりとしてのイメージ分析など、フェミニズム批評以後のかの子研究の可能性を提示してみたい。

- 竹中恵美・久場嬉子編『労働力の女性化—21世紀へのパラダイム』有斐閣選書
- 内藤和美「女性・家族・暴力」『女性労働問題研究』第25号
- 堀口悦子「フェミニズム法学が得たもの、失ったもの」『明治大学大学院紀要 第31集 法学篇』
- 岩本美沙子「フェミニズムと政治権力」『講座 現代の政治学』第1巻 青木書店
- 同上 「フォード主義国家と性役割—フレキシブルな社会を展開して」三重大学社会科学学会『法経論叢』第11巻第2号

●選挙管理委員会から

第8期幹事選出選挙の開票を3月25日に終え、現在上位得票者に幹事承諾の確認を行なっています。選挙結果については次回のニュースで報告します。

なお、本会では10名の選挙選出幹事のほかに、幹事会により5名の委嘱幹事が指名されることになっています。近年、新入会員がふえたため、どんな人材が会員の中にいらっしゃるか、幹事経験者にもつきまぎれなくなっています。新入会員、若い会員の中で、学会の運営に積極的にかかわってみたいという方は、申し出て下されば選管から幹事会に推薦したいのでご連絡下さい。

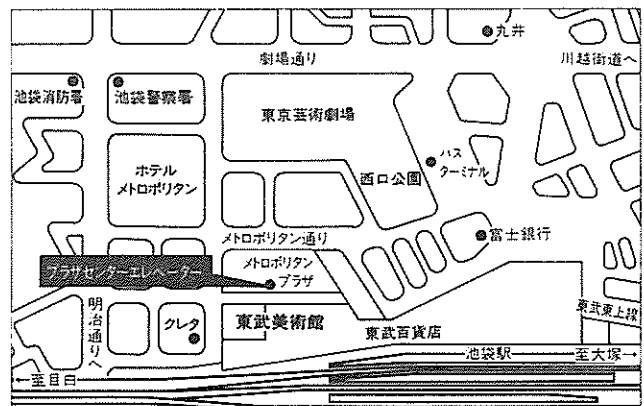
●会員の著作紹介

細谷 実『性別秩序の世界 ジェンダー／セクシュアリティと主体』マルジュ社

< 会場案内図 >

エポック10  
豊島区立男女平等推進センター  
〒171 豊島区西池袋一丁目11番1号  
メトロポリタンプラザ 10階  
TEL. 5954-1015

エポック10への直通エレベーターは、1ヶ所しかありません。ご注意ください。1階・東武美術館入口斜め前の「プラザセンターエレベーター」で10階にお越し下さい。



お待たせしました！

日本女性学会学会誌『女性学』VOL. 2 刊行される！

〈内容〉

1. 論文

- 高齢者福祉とフェミニズム  
女性と資本主義  
—「マルクス主義フェミニズム」の理論的枠組—  
古田 睦美  
リベラリズムへの抵抗原理としてのフェミニズム  
桑原 糸子  
植民地の入口と出口：トニ・モリスン『ピラヴィド』  
とアメリカにおける他者化の政治  
新田 啓子  
フランスの『婦人の百科事典』（1821-1823）の企画  
と出版をめぐる—その限界と意義について—  
小山美沙子  
はびこる女性差別と「コクサイ人」のゆくえ  
—中学英語教科書の実態と今後の課題—  
佐々木恵理  
「男性」の思想と社会の形成  
—仕組まれた「水子信仰」のルーツと展開—（上）  
蒔口 明代

2. 研究ノート

- 中国の女性文字『女書』の紹介 井上 治代  
ブラック・フェミニズムの源流を探る  
—『黒人の声』誌（1904-07）を手がかりに—  
岩本 裕子  
女性詩におけるフェミニズム認識の諸相  
中島 美幸  
3. 情報  
見てきた聞いてきた、アメリカ・カリフォルニア州  
の同性愛者の権利・女性とエイズ  
北沢 杏子  
『国際女性作曲家事典』をめぐる 小林 緑  
生殖の自己決定権の今  
—日本におけるピルの解禁凍結をめぐる—  
岩本美砂子

4. 書評

- マリー・デュリュ＝ベラ著（中野知律訳）  
『娘の学校—性差の社会的再生産—』  
千田 有紀

★『女性学』VOL. 2 合評会のお知らせ★

学会誌2号編集委員会は、く『女性学』vol. 2を会費納入済みの全会員に5月下旬（予定）、無料配布します。  
つきましては、学会誌『女性学』vol. 2の合評会を以下のとおり開催しますので、是非ご参加下さい。  
会員各位のご意見・ご批判をお待ちします。次号への引き継ぎのワンステップになることを期待しています。

記

1. 日 時：1994. 6. 18（土）10：30～12：00 A.M.
2. 会 場：豊島区立男女平等推進センター 「エポック・10」 会議室  
〒171 東京都豊島区西池袋1-11-1 メトロポリタンプラザ10F  
☎ 03-5954-1015 最寄り駅：池袋駅（徒歩1分）

\*お願い——く『女性学』vol. 2の販売にご協力下さい。会員には無料配布しますので、学会買い上げ残部580冊を販売しなければ次号発刊の予算が不足します。なお、1000冊が新水社より書店ルートで発売されます。販売・購入にご協力下さる会員は下記の要領をお願いします。〔頒価 1割引 ¥1800+送料310=¥2110〕  
申し込み先（学会買い上げ分）：学会誌会計—桑原糸子（FAX.0427-46-5226または葉書—住所は名簿参照）  
払い込み先：郵便振替「東京4-561997 日本女性学会学会誌会計係」

日本女性学会学会誌2号編集委員会